

女帝への螺旋階段

第一稿

作・壽倉雅

【登場人物】

- 日高（時沢）香子（51） 主人公。健雄の後妻。時沢製菓株式会社総務部長
- 時沢小百合（21） 健雄と典江の一人娘。大学生
- 峯原典江（47） 小百合の母、健雄の前妻。イタリアビストロ『ブルーローズ』オーナー
- 時沢健雄（52） 小百合の父。時沢製菓株式会社代表取締役社長
- 金森勝（39） 香子の部下。時沢製菓株式会社総務部主任
- 横田久代（52） 料亭『よこた』女将
- 阿井島泰典（54） 啓太の父。株式会社阿井島食品代表取締役社長
- 丹崎譲吉（71） 典江のパトロン。株式会社丹崎ホールディングス代表取締役社長
- 村瀬あかり（28） 千鶴子の秘書
- 阿井島啓太（21） 泰典の息子、小百合の彼氏。大学生
- 橘美里（62） 時沢家の家政婦
- 時沢義和（55） 千鶴子の婿養子。時沢製菓株式会社常務取締役
- 時沢千鶴子（54） 健雄の姉。時沢製菓株式会社専務取締役

1 街（夜）

雷がゴロゴロと鳴り、大雨が降っている。

2 町工場（夜）

二つの首吊り遺体が、天井からぶら下がっている——その遺体を呆然と見ている五歳の少女。

3 大宮駅

人の行き交いが激しい。

4 時沢製菓大宮中央店・全景

『時沢製菓』は、東京に本社の社屋を構え、全国にチェーン店を数多く持つ日本有数の製菓店である。

5 同・店内

来店客が多く賑わいを見せている——奥の厨房では、パティシエがケーキ作りに精を出しており、店舗スタッフは接客や袋詰めされた焼菓子を店頭に並べている。その中で、接客をしている女性・日高香子（51）。

香子「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

出ていく客——パティシエ、店内に顔を出すと、

パティシエ「（香子に）マネージャー、ちょっと手伝ってもらえますか？」

香子「分かったわ」

6 時沢製菓株式会社本社・全景

都心の中心部にある高層ビル——

7 同・ミーティングルーム

試食用のお菓子が何作も並んでおり、代表取締役社長・時沢健雄（52）、専務取締役・時沢千鶴子（54）、常務取締役・時沢義和（55）を中心とした役員たちが試食をしている。

健雄「んー、このレモン風味は良いかもしれないが、ちょっと酸味が強い気がするな」

義和「そうですね。色や形のバランスが良いだけに勿体ない。もう少し改善の余地がありそうですね」

千鶴子「どれも二番煎じや、元のお菓子をリメイクしたようなものばかりね。もっと斬

新に、消費者があつと驚くようなものを考えられる社員はいないのかしら」

義和「そこまで言うことないだろ」

千鶴子「妥協なんてしたら良いものなんて作れないの。あなたは婿養子だから、時沢製菓の行く末のことなんてどうでも良いかもしれないけど」

義和「……」

健雄「姉貴……いや、専務。今は仕事 중이다。私情は慎むように」

千鶴子「私は本当のことを言ってるだけよ。こんなお菓子、食べるだけ時間の無駄だわ。私は失礼するわ」

と、不機嫌そうに出ていく——健雄と義和、険しい顔で見ている。

8 時沢製菓大宮中央店・全景（夜）

9 同・店内

店員たちが後片付けをしている——香子が伝票の計算をしている。

香子「よし、今週の売上も順調ね。（と一同に）皆さん、今日も一日お疲れ様でした」

店員たち「お疲れ様でした」

香子「最近この辺りも新しい洋菓子店も増えてきて、競争が激しくなっていますが、私たちは変わらず、時沢製菓の美味しいお菓子をお客様に食べていただけるようにサービスを徹底していきますよ」

店員たち「はい！」

店員A「そういえばマネージャー。先ほどマネージャーが接客中にこんな封筒が届いたのですが」

香子、封筒を受け取る——封筒は『時沢製菓株式会社』と書かれている。

差出人の住所を見る香子。

香子「東京都新宿区……。本社からだわ」

と、封筒を開けると、一枚の書類を取り出す。書類を開けると、香子の目に映る『辞令』の二文字。

香子「辞令……」

店員たちが顔を合わせる。

香子『埼玉・大宮担当エリアマネージャー日高香子殿 貴殿を令和二年十月一日付けをもって本社総務部長に任命します』

店員たちが騒然とする。

香子「私が、本社の総務部長……」

店員B「やったじゃないですか。本社の総務なんて栄転ですよ！」

店員C「あなた知らないの？ マネージャーは元々入社当時、本社の商品開発部にいたんだから」

香子「いつ以来かしらね、本社に戻るのなんて。十月一日か……。とカレンダーを見てあと一週間で引越しの準備しなきゃな」

辞令を見つめる香子。

10 時沢製菓株式会社・専務室（一週間後）

デスクに座る千鶴子の前に、香子の辞令を差し出す専務秘書・村瀬あかり（28）。

あかり「本日より、日高香子さんが本社総務部長となります。（ともう一枚書類を出し）これが、異動経歴書です。人事部からコピーもらってききました」

千鶴子（書類を見て）へえ、入社当時は商品開発部だったのね。その後博多店、尾道店、岐阜店、結構全国回ってたのね。それで金沢店の店長やった後、埼玉・大宮エリアマネ

「ジャーと……随分な経歴ね」

あかり「申し分ない人材かと思えます」

千鶴子「結婚はしてないのかしら。五十一にもなって」

あかり「入社以来、時沢製菓のために尽くしていたら婚期を逃したと聞いています」

千鶴子「仕事はできても、人間性に訳ありなのかしら」

あかり「……」

11 同・社長室

香子の辞令を見ている健雄。

健雄「日高香子って……まさか……」

12 同・総務部

香子が社員たちに挨拶をしている。

香子「本日付でこちらの総務部長として赴任しました、日高香子です。本社勤務は久しぶりなので、いろいろ分からないこともあると思いますが、よろしく願います」

拍手をする社員たち——その中にいる、総務部主任の金森勝（39）。

13 同・廊下

勝が香子に社内を案内している。

香子「こうしてみると、大分本社も変わったわね。まあ無理もないか。私が最後に本社にいたのは二十五年も前だもの」

勝「二十五年前はどんな感じだったんですか？」

香子「ちよūdバブルが崩壊してすぐの頃で、不景気真っ只中だったわ。当時商品開発部にいたんだけど、あの時はとにかく売れる商品を作らなきゃって必死だったわ。世界的パティシエとコラボして、商品を企画したり、大変だったけど懐かしいわ」

勝「この会社が本当に好きなんですわね、部長は」

香子「ええ」

勝「あ、ちよつと一本吸ってきて良いですか？」

香子「喫煙所は変わってない？」

勝「はい」

14 同・ラウンジ

香子と勝がやってくる——自販機の奥の小部屋に喫煙所がある。

勝「ここが喫煙所になります。では、一本だけ吸ってきますわね」

香子「どうぞ」

勝がドアを開けようとすると、逆にドアが開き、健雄が出てくる。

勝「社長ッ……」

と、慌てて一礼をする。

香子と健雄、お互いに気づき、見つめ合う。

勝「部長……？」

香子「その煙草の銘柄、まだ吸ってたんですね」

健雄「やっぱり君だったか……」

勝「え？」

香子「お久しぶりです。二十五年ぶりですね。すっかり社長らしくなられて」

健雄「君も昔と全然変わってないよ」

香子「……」

健雄「……久しぶりに会って、積もる話もある。どうだ、今晚食事でも」

香子「……」

健雄「ここから車で十五分ほどのところに、『よこた』という料亭がある。十九時に待って
る」

と、去っていく——勝、一礼する。

香子「……」

勝「部長、社長とお知り合いだったんですか？」

香子「ええ……」

勝「あ、そういえば社長、入社当時商品開発部だって聞いたことがあります。同僚だったんですね」

香子「……それ以上の関係よ」

勝「え……？」

香子「結婚を前提に付き合ってたの」

勝「マジですか……」

香子「それ以上は聞かないで。さ、早く吸うなら吸ってきて」

勝「あ……はい……」

と、慌てて喫煙所に入っていく——香子、難しい顔をしている。

15 料亭『よこた』・一室(夜)

健雄が懐石料理を食べている——襖が開き、女将・横田久代(52)が入ってくる。

久代「失礼いたします。時沢社長、お連れ様がお見えになりました」

健雄「ありがとうございます。お通しして」

久代「どうぞ」

と、香子が入ってくる。

健雄「よく来てくれた」

久代「どうぞごゆっくり」

と、去っていく。

健雄「ここは、いつも取引先の社長との会食でよく使ってるんだ。料理も美味いしな」

香子、健雄と向き合うように座る。

香子「お注ぎしますよ」

と、徳利を持って健雄のおちよこに注ぐ。

健雄「いつまで敬語なんだよ」

香子「私たちはもう赤の他人なんです。それに社長と総務部長の関係なんですから」

健雄「この二十五年、君のことを忘れたことはなかったよ」

香子「……」

健雄「今でも、どうしてあの時、ちゃんと守ってやれなかったんだろって」

香子「そんなこと言うと、奥様に怒られますよ」

健雄「女房とは離婚した」

香子「え？」

健雄「一番の原因は姉貴との折り合いが悪かったことなだけだな」

香子「今、お姉様は専務でしたね」

健雄「ああ」

香子「おそらく向こうは、私の事なんて忘れてるでしょうね。当時から傲慢な性格だったのは社内でも有名だったじゃありませんか」

健雄「そうだったな……」

香子「別れた奥さんとの間にお子さんとかいらっしやらないんですか？」

健雄「大学三年になる娘がいる。今は、姉貴夫婦と俺との四大家族だ」

香子「親子仲はどうなんです？ 大学生だったら、一番遊びたい年頃じゃないんですか」

健雄「大学生活を楽しんでるみたいだ。ただ、姉貴との仲は悪いけどな」

香子「そりゃ、あんな人と一緒に住んでたら、仲が良くなるわけじゃないでしょうね」

健雄「君こそどうなんだ。結婚はしたのか？」

香子「仕事一筋で生きてきたので、五十超えても結局誰からも嫁の貰い手がありませんでしたよ」

健雄「そうだったのか」

香子「ええ」

健雄「一つ聞いて良いか？」

香子「何です？」

健雄「あの時、時沢製菓を辞めることだってできたのに、どうして博多店への異動を選んだんだ？」

香子「……意地かもしれません」

健雄「意地？」

香子「そりゃ、こんなところ辞めてやるとも思いました。でもここで逃げたら負けだと思っ
て、是が非でも居座ってやるっていう気持ちで時沢製菓に残ったんです。遠い所から、
健雄さんを見守れたらって……」

健雄「香子……」

香子「悔しかったですよ。非情にもあんな別れ方をお姉さんからさせられたんですから。
けどあれ以上は反抗できなかった……地方の支店に異動したのは、私にとっての最大の
反抗だったんです」

難しい顔で香子を見る健雄。

16 時沢家・全景（夜）

本社ビルから車で三十分ほどの郊外にある和洋折衷の大きな豪邸。

17 同・玄関

千鶴子が帰宅する——家政婦・橘美里（62）が迎える。

美里「お帰りなさいませ。お食事になさいますか？」

千鶴子「先にお風呂入るから、支度だけしといてちょうだい」

美里「かしこまりました。社長と常務はそれぞれ会食で、小百合お嬢様も典江さんのところで食事をしてくるとのことでした」

千鶴子「またあの女のところに行ってるのね。母親のところになんか行きたいなら、この家から出て行ってほしいわね。ただでさえあの小娘は目ざわりだから」

美里「……」

18 イタリアビストロ『ブルーローズ』・表

『ブルーローズ』は、健雄の元妻・峯原典江（47）がオーナーを務めるおしゃれな高級イタリアンレストラン。

豪華なドレスコードをしている典江が客の見送りに来ている。

典江「ありがとうございます。またのお越しお待ちしております」

19 同・店内

健雄と典江の娘・小百合（21）が、彼氏・阿井島啓太（21）と食事をしている——典江がやってくる。

典江「こんなところに来てて大丈夫なの」

小百合「ちゃんとお金は払うわよ。ママに甘えてたら、またあの意地悪ババアに何言われるか分からないから」

啓太「もしかして、時沢製菓の専務？」

典江「あら、もうすっかり啓太君は、うちの事情をいろいろ知ってるみたいね」

啓太「大学でよく伯母さんの話は聞いてますから」

典江「小百合。あんた、よそ様に人ん家の家庭事情なんて話すもんじゃないわよ」

小百合「しょうがないでしょ。私の愚痴のほとんどが千鶴子伯母さんのことなんだから」

啓太「小百合が、僕に愚痴を吐いて少しでも楽になるんだったら、いくらでも吐いてもらってかまわないので」

小百合「ほらね。啓太もこうやって言ってくれてるんだから」

典江「ごめんね、啓太君。小百合はこの通り、自由気ままな子だから」

啓太「良いんですよ。僕は、こういう自由なところが好きなんですから」

典江「小百合、あんた幸せ者よ。こんな風に言ってくれるなんて。大事にしないとバチが当たるわよ」

と、ドアが開き、丹崎讓吉（71）が来店する。

讓吉「やあ、遅くなって申し訳ない」

典江「丹崎社長。お待ちしております。奥の個室へどうぞ」

と、案内していく。

讓吉「（小百合に）こんばんは、小百合ちゃん」

小百合「こんばんは」

讓吉「また一段とキレイになって。さすがは典江ママの娘だ」

典江「まあ、社長ったらお世辞が相変わらずお上手なんですから」

と、奥へ案内していく。

啓太「誰、あの人？」

小百合「丹崎ホールディングスって知ってる？」

啓太「ああ。確か、不動産事業を中心に飲食からアパレルまでいろいろやってるところだろ」

小百合「そう。その社長だよ」

啓太「あの人が？」

小百合「そう。ママのビジネスパートナーでもあるの。この店オープンしたときも、三分の一を開業資金として出資したって言ってた」

啓太「小百合のお母さん、すごい人と一緒に仕事してるんだな。俺も頑張ってるという経営者にならないと」

小百合「お、エンジンかかった感じ？」

啓太「まあな」

笑い合う小百合と啓太。

20 マンション・一室（夜）

香子が帰宅する——部屋の明かりをつけると、ソファーに座り込む。

21 時沢製菓株式会社本社・会議室（回想）

T「25年前」

香子が座っている——千鶴子が、札束の入った封筒を香子の前に投げ捨てる。

封筒から、百万円の束が二束飛び出る。

香子「何ですか、これは？」

千鶴子「手付金よ」

香子「手付金？」

千鶴子「その二百万あげるから、弟と別れてほしいの」

香子「どうしてですか？」

千鶴子「金が目当てで健雄と近づいたんですよ。始めからあなたの魂胆は分かっているわ」

香子「席から立ちあがると」私は、お姉さんや時沢の家と結婚するんじゃないんです。健雄さんと結婚するんです。そのところ、はき違えないでいただきたいです」

千鶴子「（香子の両頬を片手で掴み）生意気な口聞くんじゃないわよ」

香子「……」

千鶴子「あんたみたいな女と健雄を結婚させるわけにはいかないのよ。あの子はいずれ、

この時沢製菓を継ぐ子なの。そんな大事な跡取りの妻を、あんたみたいな女に任せられるわけないでしょ」

香子「……」

22 マンション・一室（回想戻り）

香子「……」

そのままソファーに横たわる香子。

23 夜の街を走るリムジン

24 リムジンの車内
後部座席に座っている健雄。

25 時沢製菓株式会社本社・商品開発部（回想）

商品開発に没頭している若き日の香子と健雄。

健雄「なあ、そろそろ休憩するか」

香子「これが終わってからね」

健雄「さつきからそれ何度目だよ」

香子「何が？」

健雄「これが終わってからって、ずっと言ってるぞ」

香子「次こそ、これが終わったら休憩するから」

笑っている健雄。

26 高級レストラン（回想）

香子に指輪を出す健雄。

健雄「香子、結婚しよう」

香子「はい……よろしくお願いします」

微笑み合う香子と健雄。

27 香子のイメージカット

香子「さよなら、健雄さん」

28 リムジンの車内（回想戻り）

健雄「香子……」

29 時沢製菓株式会社本社・全景（朝）

T 「1ヶ月後」

30 同・総務部

香子が仕事をしている——勝が書類を提出しに来る。

勝「部長。年明けの新年会の企画書です。チェックお願いします」

香子「ああ。新年会の設営は、総務部が担当するんだっけ？」

勝「はい」

香子「ここに来て早いもので一ヶ月。ようやく総務の仕事に慣れてきたと思ったら、今度

は新年会設営の準備だものね。この書類、また目を通しておくわ」

勝「お願いします」

と、席に戻ろうとすると、再び香子のもとへきて、

勝「(小声で)部長、最近どうなんですか？」

香子「何が？」

勝「社長とですよ。食事によく行かれてるそうですけど」

香子「社長とはあくまでも仕事上の付き合いなの。勘違いしないでちょうだい。ほら、無駄口叩く前に仕事しなさい」

31 同・社長室

健雄、千鶴子、義和が会議をしている——上の空で話を聞いている健雄。

千鶴子「組合の理事長たちとの懇親会の件だけ……(と健雄の様子に気づき)社長？」

健雄「……」

義和「社長……？」

千鶴子「健雄ッ……！」

健雄「ん？ どうした？」

千鶴子「人の話聞いている？」

健雄「すまない。何の話だっけ？」

千鶴子「しつかりしてよ。組合の理事長たちとの懇親会のことについてのことよ」

健雄「ああ、そのことか。あのおじさま連中には、コンパニオンを呼んで適当にあしらっておけば良いよ。こちら側が何か気を使う必要もない」

千鶴子「そんな無責任なことできるわけないでしょ。何がコンパニオンよ」

義和「しかし専務。あの理事長たちのことです。そういう設えをするだけでも、十分かと思われませう」

健雄「常務もそう思うだろ？」

千鶴子「あんな小娘たちにチャホヤされるだけで十分なんて、本当男は単純なんだから。

じゃあこの件については、私に一任していただけるわね」

健雄「ああ、よろしく頼むよ」

呆れ顔の千鶴子。

32 同・専務室

あかりが仕事をしている——千鶴子が不機嫌そうに戻ってくる。

あかり「専務、どうかされましたか？」

千鶴子「ねえ」

あかり「はい」

千鶴子「最近、社長の様子変じゃない？」

あかり「そうでしょうか？」

千鶴子「あなた、何にも気づかないの？」

あかり「特には」

千鶴子「(ヒステリーに)いつも社長と顔合わせてるんだから、何か異変の一つや二つ気づくでしょ」

あかり「そう申されても、私には分かりかねます。専務は、家でも社長と顔を合わせてる

「じゃありませんか」

千鶴子「社長は、家にはほとんど寝に帰ってくるのが最近多いの。まともに家じゃ顔合わせてなんかないわ」

あかり「そうですか」

千鶴子「何か隠してるわね……ちょっと調べてきてくれないかしら」

あかり「かしこまりました」

と、頭を下げると、「面倒くさそうな顔をする。

33 同・ラウンジ

香子が自販機でジュースを買っている——健雄が喫煙所から出てくる。

少し奥のほうで、あかりが通りかかる。健雄の姿に気づくと、壁際に隠れて動きを見ている。

健雄「今日、食事どうだ？ 大事な話がある」

香子「ここじゃダメなんですか？」

健雄「二人きりじゃないとダメなんだ」

香子「……」

あかり、二人が話している様子を、こっそりスマートフォンで撮影すると、去っていく。

34 同・専務室

あかりが、スマートフォンで撮影した香子と健雄の写真を千鶴子に見せている。

千鶴子「これは……」

あかり「二人きりで話したいと、随分と親密そうな雰囲気でした」

千鶴子「誰なの、この女」

あかり「先月赴任してきた、総務部長の日高香子です」

千鶴子「総務部長……」

と、引き出しを開けて、香子の異動経歴書を取り出す。

千鶴子「この女ね」

あかり「はい」

千鶴子「総務部長の分際で、一体どんな魂胆持ってるのかしら」

香子の異動経歴書を握りつぶす千鶴子。

35 料亭『よこた』・全景（夜）

36 同・表

タクシーが止まり、香子が降りてくる——ドアを開けると、久代が迎える。

久代「いらっしやいませ。社長がお待ちですよ。さ、どうぞ」

と、案内していく。

37 同・一室

健雄が香子のグラスにビールを注ぐ。

健雄「お疲れ様。乾杯」

香子「乾杯」

と、乾杯をして、お互いビールを飲む。

健雄「どうだ、総務の仕事は慣れたか」

香子「あつという間の一ヶ月でした。今は新年会の準備を始めているところです」

健雄「よろしく頼むよ」

香子「総務主任の金森君に助けられています」

健雄「彼は総務が長いからな。何でも相談すると良い」

香子「はい」

健雄「俺の知り合いの社長がな、『良い企業には良い総務がある』って、よく言うんだ。本当にその言葉の通り、うちは総務部がしっかりしてくれてるから会社が保てていると思ってるんだ。その総務部長に香子がなってくれて、俺はすごく安心してるんだ」

香子「何ですか。急に改まって」

健雄「……実はな」

香子「……？」

健雄「総務としてだけでなく、俺を支えてほしいんだ」

香子「……」

健雄「ずっと俺の隣にいてほしい」

香子「社長……それって」

健雄「シャイだからさ……あまりストレートに言えねえんだよ」

香子「……」

健雄「俺は二十五年前、君を守れなかった。それは前の嫁と結婚した後も、ずっと引きずってたことだ」

香子「……」

健雄「だから、今度こそはちゃんと守ってやりたいって思ってたんだ」

香子「本当にそう思ってくれてるんですか？」

健雄「ああ……。先月、君が本社に戻ってきた日から、これは神様がもう一度俺にチャンスを与えたんだって思った。中年親父の戯言かと思うかもしれないが、俺は本気だ。君の気持ちを聞かせてほしい」

× × ×

〈フラッシュ〉

商品開発部時代、一緒に仕事をしている香子と健雄。

× × ×

二十五年前の千鶴子。

千鶴子「その二百万あげるから、弟と別れてほしいの」

× × ×

香子「……」

健雄「香子……」

香子「私だって、社長……健雄さんとの幸せな生活を何度夢見たことか」

健雄「……」

香子「お姉さんに二百万の札束を渡されて健雄さんと別れてくれと言われたときは、本当に辛かった……」

健雄「……」

香子「でも、もう逃げません」

健雄「……」

香子「私、健雄さんと結婚します」

健雄「本当か？」

香子「健雄さんと一緒に幸せになって、お姉さんを見返してやります」

健雄「そうだよ。今からでも遅くない。一緒に、あの時みたいにもう一度、幸せになろう」

健雄、香子の手を握る。

香子「はい……」

見つめ合う香子と健雄。

38 時沢家・全景(夜)

39 同・玄関

健雄が帰宅する——美里が迎える。

美里「お帰りなさいませ」

健雄「みんな、まだ起きてるか？」

美里「ええ」

健雄「じゃあ、みんなをリビングに集めてくれ」

美里「はい……」

40 同・居間

健雄、千鶴子、義和、美里が顔をそろえている——小百合が遅れて入ってくる。

小百合「何？ 私、明日朝から講義なんだけど」

健雄「すぐ終わるよ。ただ、大事な話だからみんなに集まってもらったんだ」

千鶴子「何事なのよ、一体」

健雄「俺、再婚することにしたよ」

千鶴子「健雄、あんた何言ってるのよ。そんな冗談」

美里「旦那様、本気ですか……」

健雄「冗談なんかじゃないよ」

義和「相手は誰なんです？」

健雄「うちの本社の総務部長をしている日高香子さんだ」

千鶴子「日高香子って、あの先月赴任してきた……」

健雄「そうだ」

小百合「パパ。本気なの？」

健雄「ああ」

小百合「ママはどうなるのよ。再婚なんてしたら、私はもう一人母親が増えるってこと？」

千鶴子「だったらあんたが、実の母親のところに行けば良いだけの話でしょ。早く出て行ってほしいわ」

健雄「姉貴、小百合は俺の娘であり、時沢製菓の後継者なんだ。典江とは関係ないだろ」

千鶴子「こんな小娘に継がせるぐらいだったら、潔く会社畳んだほうがマシよ」

小百合「(小声で)マジウザ……」

健雄「今度、うちに呼んで、みんなにも会ってもらいたいんだ」

義和「私は大歓迎だ」

千鶴子「あんたって本当呑気ね。健雄の妻になるってことは、社長夫人ってことよ。私の許可もなしに、素直に認めるわけにはいかないでしょ。これだから婿養子は、結局他人事だとしか思っていないんだから」

義和「……」

健雄「ちなみに、姉貴は二十五年前に香子に会ってるぞ」

千鶴子「え？」

健雄「二百万の手付金を渡そうとして、俺と別れさせたじゃないか」

千鶴子「そんな昔のこと、覚えてないわ」

健雄「香子はそのショックで俺の前から姿を消して、博多店に異動したんだ」

千鶴子「ああ。異動経歴書に本社からいきなり博多店に異動したのは、そんな理由があったのね。すっかり忘れてたわ。健雄に近づく女なんてみんなロクな女じゃないって思ってるから。ちゃんと私がこの目で見て吟味しないと」

小百合「じゃあ、うちのママもロクな女じゃないって言いたいわけ？」

千鶴子「そうじゃなかったら、離婚した慰謝料で変なイタリアンレストランなんて開かないでしょ。結局は金が欲しかったのよ。時沢製菓の社長夫人っていうステータスがほしいってだけで、健雄のことなんて愛してなかったのよ」

小百合「それ以上ママの悪口言ったら、殺すよ」

健雄「小百合ッ……(とたしなめる)」

小百合「パパは悔しくないの。ママのことひどく言われて。こんな扱い受けるのが嫌だったから、ママは出ていったんじゃない。みんな伯母さんのせいよ。私やママのことを邪魔者扱いしてるけど、本当は伯母さんがこの家の疫病神なんじゃないの？」

千鶴子、小百合を睨めつける。

小百合「こんな話、付き合ってもらえない。再婚なんて認めないから。じゃ、お休み」

美里「おやすみなさいませ」

小百合、憤然と出ていく。

千鶴子「私も再婚をあっさり認めるわけにはいかないわ。二十五年も経って今さら健雄と一緒にになりたいなんて、あんたの金目当てに決まってるじゃない。本当に見る目ないんだから」

と、ブツブツ文句を言いながら出ていく。

健雄「……」

義和「私は婿養子だから偉そうなことは言えないが、健雄君には幸せになってほしい。そのためにも、再婚は全然問題ないと思うよ」

健雄「ありがとう、義兄さん」

優しくうなづく義和。

41 イタリアビストロ『ブルーローズ』・全景（夜）
『CLOSE』の看板がかかっている。

42 同・店内

典江が電話で話している。

典江「え、パパが？　すごい爆弾持ってきたわね。へえ、時沢製菓の社員ねえ。え、二十五年前に伯母さんに無理やり別れさせられたって言ったの？　当時から屑みたいな性格だったんだね、伯母さんは。分かったわ。また何かあったら教えて。うん、じゃあお休み」

と、携帯電話を切る。

典江「面白いことになってきたわね」

奇妙な笑みを浮かべるとワインを飲み干す。

43 マンション・一室（数日後）

香子が出かける支度をしている——化粧台の鏡を見ながら、化粧をしている。

44 時沢家・玄関

香子がインターホンを鳴らす——ドアが開き、美里が迎える。

美里「日高香子さんですね」

香子「はい……」

美里「私、時沢家の家政婦をしている、橘美里と申します。旦那様からお話は伺っております。どうぞ」

香子「失礼します」

と、おずおずと中へ入っていく。

45 同・応接間

香子と健雄が座っており、向かい側に千鶴子、義和、小百合が座っている——緊張の面持ちになっている香子。

香子「日高香子と申します」

健雄「（香子に）改めて紹介するよ。左から娘の小百合、姉の千鶴子。姉の旦那の義和だ」

香子「専務と常務ですよ。よく存じてます」

小百合「私、出かけるわ」

と、出ていく。

健雄「小百合ッ……」

千鶴子「母親のもとに行ってくれないかしらね。出てったほうがせいせいするわよ」

健雄「姉貴……」

義和「（香子に）結婚は、もう決めたことなんですか？」

千鶴子「あなたッ……」

香子「はい」

千鶴子「……」

香子「私、実は二十五年前に健雄さんと結婚を前提にお付き合いしてたんですが、（と千鶴子を見て）手付金を受け取ることを条件に健雄さんと別れさせられたことがあります」

義和「ひどい話だ……」

千鶴子「私は覚えてないわ、そんな話」

香子「だから私、決めたんです。今度こそ、健雄さんと幸せになってみせると」

千鶴子「けど、あなたは時沢製菓本社の総務部長なのよ。健雄と結婚した後、仕事はどうするの？ まさか社長夫人が総務部長をやるとも言うの？ そんな話聞いたことないわ」

香子「前例がなかったらダメとでもおっしゃるんですか？」

千鶴子「何ですって？」

香子「今の事例には必ず最初があります。前例がないのだったら、その最初になってやるうというのが私のポリシーですから」

千鶴子「口から出まかせなんて何とでも言えるわ。二十五年も経ってまた健雄と一緒にいたいなんて、あなた、健雄じゃなく『社長』という肩書き持つてる人なら、誰でも良かったんじゃないの？」

義和「おいッ……」

健雄「姉貴、少しは言葉を慎めよ」

千鶴子「私は本当のこと言ってるだけよ」

香子「健雄さんに近づく女性のことをそんな風にしか見てないなんて……。大手企業の専務なのに、人を見る力がおありにならないんですね」

千鶴子「あなた、さつきから誰に向かって口聞いているの。私は時沢製菓株式会社専務よ。総務部長とはいえ、ただの一介の社員であるあなたなんて、私の力で何とでもできるのよ」

香子「私、総務部長である以前に、健雄さんの妻になると決めましたから」

千鶴子「……！」

香子「今日はそのことを、はっきりと申し上げたいと思います」

黙ってしまう健雄と義和——睨み合う香子と千鶴子。

46 イタリアビストロ『ブルーローズ』・店内（夜）

カウンタ―席で小百合がワインを飲んでいる——典江が接客をしている。

典江「飲み過ぎじゃない？ やけ酒を飲む娘の姿は見たくないけど」

小百合「パパ、本気であの女と結婚する気なんだよ」

典江「二十五年前に無理やり別れさせられたって言うってたけど、どんな女なの？」

小百合「少ししか顔合わせてなかったけど、キャリアウーマンのオーラが出てたわ。やっぱり仕事一筋で生きてきた人だから、伯母さんと闘うことは覚悟の上なのかもね」

典江「なかなか手ごわい相手だけだね。ママはあの人と一緒に暮らすことがそもそもストレスだったから」

小百合「結局あの方は、自分とパパ以外は誰も信用してないんだよね」

典江「そこまで人を信用しないんだったら、これからの時沢製菓、どうするつもりなのかしらね」

小百合「私に継がせるぐらいだったら、自分たちの代で畳んだ方が良いって言ってる」

典江「それこそ、亡くなったおじいちゃんたちに失礼よね。一代でここまでの規模にまで

広げたっていうのに、たった二代で会社を畳むなんて」

小百合「伯母さんが元気なうちは、ずっとワンマン状態が続くんだろうな」

典江「あなたが継いでくれれば、ママ嬉しいんだけどな」

小百合「でも私、まだ自分が時沢製菓を継いでるイメージがわかないの」

典江「そりやまだ大学三年生だもの。これから考えれば良いのよ。もし時沢製菓を継ぐの

が嫌なら、ママの店継いでくれても良いのよ」

小百合「その手があるね」

典江「ま、あなたの人生だから、どうするかは小百合が決めたさい」

小百合「分かった。(とワインを飲み干すと) もう一杯」

典江「あんた、飲みすぎだつて」

と、啓太が入ってくる。

典江「あら、いらっしやい」

啓太「こんばんは」

典江「啓太君呼んだの？」

小百合「一緒に飲みたかったの」

典江「酔って絡むようなことしちゃダメよ」

小百合「分かってる」

啓太、小百合の隣に座る。

啓太「酔ってるのか？」

小百合「浴びるほど飲みたいことだってあるの」

典江「ごめんさいね。父親の再婚相手が今日、挨拶に来たらしくてね。この子、再婚には反対みたいで」

啓太「いつまで家族に依存してるんだよ」

小百合「依存なんかしてない。パパは、私にとって大事な、この世でたった一人のパパなの。再婚なんて絶対許さない。ママだって可哀想でしょ」

啓太「(典江に) 今日は、大分悪酔いしてますね」

典江「気にしなくて良いからね。扱いにくいと思ったら帰ってくれて良いから。(と小百合に) ママこれから、奥の個室で丹崎社長と打ち合わせだから席外すわね。くれぐれも啓太君に迷惑かけるんじゃないわよ。(と啓太に) じゃ、ごゆっくり」

と、奥へ行く——小百合、自分でワインを追加する。

小百合「私、これ以上不幸せになりたくない」

啓太、小百合の肩を抱き、自分の方へ寄せると、

啓太「俺が幸せにするよ」

小百合「啓太……」

啓太「俺、正直小百合とは結婚を視野に考えてるんだ」

小百合「私もだよ、啓太」

啓太「本当か」

小百合「どうしようかな。パパの会社やママの店を継ぐことよりも、啓太と結婚して、いずれは社長夫人になるのも良いかもね。啓太、阿井島食品の社長になる人だもんね」

啓太「ああ。うちの会社の社長夫人になるのも良いじゃないか。継母や意地悪な伯母さんと無理に一緒の環境にいる必要なんてないんだよ」

小百合「そうだね」

啓太「ああ」

小百合「ねえ、今日はずっと一緒にいたい」

啓太「小百合……酔ってるのか（と苦笑してごまかす）」

小百合「私は本気だよ。酔って言うてるわけじゃないんだから」

見つめ合う小百合と啓太。

47 ラブホテル・全景（夜）

48 同・一室

ベッドの中で、情事の最中の小百合と啓太。

身体を重なり合わせ、濃厚なキスを繰り返す。

お互い強く手を握り合っている。

49 同・全景（翌朝）

50 同・一室

ベッドで眠っている小百合と啓太——小百合が、ゆっくりと目を覚ますと、布団で体を隠したまま、体を起こす。

小百合、啓太の寝顔を見つめると、ゆっくりと体を近づけ、キスをする。

51 時沢家・居間

健雄、千鶴子、義和が朝食を食べている——給仕をしている美里。

千鶴子「とうとう帰ってこなかったわね、小百合」
健雄「そうだな」

千鶴子「年頃の娘が無断外泊したのよ。あんたよくそんな呑気でいられるわね。私が母親だったら引っぱたいてたわよ」

健雄「そう思うんだったら、ちゃんと伯母として小百合に愛情を注いでほしいもんだけどな」

千鶴子「あの様子じゃ、香子さんとも上手いかないだろうね」

健雄「時間がかかるかもしれないが、血がながっていないなくても、香子と小百合には母と娘という関係性を気づいてほしいと思ってる」

千鶴子「綺麗事を言っていられるのも、今のうちよ」

義和「千鶴子……」

千鶴子「ごちそうさまでした」

健雄「そうだ。忘れないうちに言っておくが、香子とはちゃんと挙式を行う予定だから、そのつもりでいてくれ」

千鶴子「何を寝ぼけたこと言ってるの。いい歳した二人が挙式だなんて、馬鹿馬鹿しい」
義和「おい……。良いじゃないか、二人の晴れの舞台なんだから」

千鶴子「何が晴れの舞台よ。典江さんとの結婚式のときに、十分派手にやったじゃない。バツイチで再婚ってだけでも聞こえが悪いのに、また派手に挙式なんてやったら世間の笑い物よ。あんた、その覚悟があって言ってるの？」

健雄「香子にとっては、一生に一度のことなんだ。ウエディングドレス着させてあげたいじゃないか」

千鶴子「五十超えた女に何がウエディングドレスよ。そんな地獄絵図、誰がみたいって言うの。役所行って、書類一枚出すだけに留めなさい。あんた社長なんだから、これ以上時沢製菓の恥になるようなことはしないでちょうだい。良いわね」

と、不機嫌そうに出ていく——黙ったままの健雄。

52 時沢製菓株式会社本社・総務部

香子、勝、その他社員たちが仕事をしている。

勝「結婚式あげないんですか？」

香子「そうよ。専務がひどく反対してるみたいで」

勝「せっかくのイベントじゃないですか。部長、初婚ならなおさらウエディングドレス着たいでしょ」

香子「別に私はウエディングドレスを着たいがために社長との結婚決めたわけじゃないんだもの。社長は結婚式あげるつもりでいるけど、専務は婚姻届出すだけで良いだろうって」

勝「相変わらず血も涙もない人ですね、専務は。社長だって再婚とはいえ、一人の女性を幸せにするなら、専務に何を言われようが結婚式やれば良いのに」

香子「専務は一度決めた事は、自分が納得の行く結果にならないと首を縦に振らないような人だからね」

勝「あの専務がいる間は、部長もなかなか幸せな夫婦生活送れませんね」

香子「そんなこと恐れてたら、何も始まらないでしょ。自分なりに、自分の幸せを見つめるのよ」

と、笑顔で返す。

53 役所・窓口

T「半年後」

香子と健雄が婚姻届を提出する——対応する事務員。

54 同・表

香子と健雄が出てくる。

香子「私たち、やっと夫婦になれたのね。周囲にいろいろ言われてからのこの半年、長かったような短かったような」

健雄「待たせてしまつてすまなかつた。これからは、総務部長だけじゃなく、社長夫人と
してもよろしく頼む」

香子「はい」

微笑み合う香子と健雄。

55 株式会社阿井島食品・全景

『阿井島食品』は、啓太の家が経営している地域密着型の中堅メーカー。事務所と隣接して製造工場がある。

56 同・事務所

啓太の父・泰典（54）が、仕事をしている——袋を持った啓太が入ってくる。

啓太「よ」

泰典「どうしたんだ」

啓太「栄養ドリンク買ってきた（と袋を渡す）」

泰典「サンキュー」

啓太、泰典のデスクに広げられた書類の束を見つめる。

啓太「こんなに膨大な書類、一体どうするの？」

泰典「今度、アライアンス、つまり業務提携をする企業が見つかつてな。その書類を作るんだよ。我が社にとつても重要な取引内容になるからな」

啓太「どんな内容なんだよ」

泰典「いくら息子でも、これは企業秘密だ」

啓太「俺はこの株式会社阿井島食品の後継者なんだぞ。母さんも亡くなって、家族は俺しかいないんだ。話してくれても良いじゃないか」

泰典「ちゃんとうちの会社入つてから教えてやる。大学生に話しても分からないことだ」

啓太「相変わらず口が堅いんだからな。何か手伝おうか？」

泰典「良いよ良いよ。お前は家に帰りなさい。今のお前のすることは勉強だろ」

啓太「はいはい」

57 時沢家・居間（夜）

美里がステーキの入った皿をテーブルの上に並べている——それぞれ席についている香子、健雄、千鶴子、義和、小百合。

小百合「何、これ？」

健雄「今日は、新しく家族を迎え入れた記念日だから、美里さんをお願いして、豪華な夕

飯をお願いしたんだ」

小百合「食べる気しないけど」

千鶴子「そんなにめでたいことなのかしら。香子さんが家に来たことが」

義和「千鶴子……」

健雄「姉貴にも小百合にもはつきり言っておく。香子は今日から俺の妻になった人だ。姉貴にとっては義理の妹、小百合にとっては血が繋がってはいないが母親となる人だ。香子だって、何とか時沢家の一員になろうと努力してくれてるんだ。温かく迎えてくれ

よ」

小百合「私は再婚許したつもりはないから。私にとっては、ママは一人しかいないの。誰がこんな人を母親だなんて思うもんですか」

香子「……」

健雄「小百合、いい加減にしないか」

小百合「……」

健雄「今日ほめでたい席なんだ。香子のことを悪く言うようなことは許さん。香子だって家族なんだ」

千鶴子「……」

義和「……」

小百合「……」

健雄「さ、冷めないうちに食べよう」

と、インターホンが鳴る。

美里「私が出てきます」

と、出ていく。

健雄「こんな時間に誰だ」

と、玄関から美里の音がする。

美里の声「典江さん……」

健雄「典江？」

小百合「ママ？」

と、典江が入ってくる。

健雄「お前、どうして……」

典江「小百合から今日あなたが役所に婚姻届を出してきたって聞いたのよ。だから新しい門出を祝おうと思ってるね」

健雄「そうか……」

千鶴子「あなたにお祝いされたところで、健雄は嬉しくないと思うけど」

典江「相変わらずお口が達者ですわね、お姉様は」

千鶴子「(ムツとして)……」

典江「今日はね、香子さんにお祝いのお花を持ってきたのよ(と黄色いバラの花束を渡す)」
香子「ご丁寧に、ありがとうございます」

典江、奇妙な笑みを浮かべると、

典江「黄色いバラをそんな風に受け取ってもらえるなんて、光栄だわ」

健雄「……典江。お前、何でそんな花を」

小百合「何かあるの？」

義和「黄色いバラには、『嫉妬』や『ねたみ』といった花言葉があるんだ」

千鶴子「花言葉を通じて香子さんにメッセージ伝えるなんて、典江さんも随分手の込んだことしてくるわね」

典江「お姉様には、菊の花を四本差し上げればよろしかったでしょうか？」

千鶴子、憤然とすると、ワイングラスに入っていたワインを典江にぶちまける。

義和「千鶴子ッ……」

典江「何すんのよ！」

千鶴子「どこまで調子に乗れば気が済むのよ。あんたはもうこの時沢家とは関係ない人間なの。とつとと出ていってちょうだい。二度と時沢家の敷居はまたがせないわ」

典江「私こそ、こんな家に誰が二度と来るものですか（と勢いよく出ていく）」

千鶴子「まったたく……何なのあの女。健雄、これであの女の本性が分かったでしょ。別れて正解よ」

香子「……」

千鶴子「あんな性格の女だから、生まれてくる子どもロクな子に育たなかったのよ」

小百合「そこまで言うんだったら、伯母さんだって自分で子ども産めば良かったじゃない。

あ、そうか。伯父さんに子種がなかったから、子どもも作れなかったんだっけ。ご愁傷様です」

義和「……」

千鶴子、小百合をビンタする。

千鶴子「母親が母親なら娘も娘ね。ろくでなしのクズ親子がッ！」

小百合、不機嫌そうに出ていく。

健雄「小百合ッ……」

千鶴子「親子そっくりじゃない。あのひん曲がった性格。香子さんだって、今にどんな本性見せるか分からないわよ」

香子「……」

健雄「香子はそんなこと……」

千鶴子「（遮って）どうかしらね。あんた、本当に女見る目ないんだから。先が思いやられるわ。ああ、もう夕飯食べる気失せた。部屋で仕事したほうが何万倍もマシよ」

と、出ていく——啞然としている香子。

義和「俺たちだけで食べるか」

香子「……」

健雄「香子」

香子「いただきますしよう。せっかく用意してくださいだったので。心から祝ってくれる人さえいれば十分です」

美里「では、ステーキ温めなおしますね。ワインもお取替えますわ」

健雄「すまない、よろしく頼む」

香子、落ち着かない顔をしている。

58 同・夫婦の部屋

香子と美里が段ボール箱の整理をしている。

美里「香子さんのお荷物は、これだけでよろしかったですか？」

香子「はい」

美里「随分身軽に來られたんですね」

香子「新居に引っ越すなら、もっと荷物もあったかもしれませんが、ここなら物は揃ってますから」

美里「さようでしたか」

香子「ねえ、美里さん」

美里「はい？」

香子「この家について、何とも思わないの？」

美里「千鶴子さんは、昔からあの通りの性格です。私は、もうこの家で住み込みの家政婦をさせていただいて四十年近くなります。時沢家の修羅場は幾度となく見てきましたから、もう慣れました」

香子「そうですか……私は、慣れるのに当分かかりそうです」

美里「香子さんは、健雄さんの奥様、つまり社長夫人になられたんですよ。誰に遠慮することも気兼ねすることもないんです。もう少し自分に自信をお持ちになったらいかがですか？」

香子「……」

美里「今日はお疲れになりましたでしょ。今晚はゆっくりとお休みください。では、私はこれにて」

と、一礼すると出ていく。

香子「社長夫人か……」

59 時沢製菓株式会社本社・全景（朝）

60 同・会議室

取締役会が行われている——それぞれ席についている健雄、千鶴子、義和、その他取締役の役員たち。

千鶴子「その場に立ち上がると、

千鶴子「では私の担当審議案件を答弁させていただきます。お手元の資料をご確認ください、」

資料を見る一同——資料の表紙には『株式会社阿井島食品との吸収合併について』と書かれている。

千鶴子「阿井島食品は、皆さんご存知のとおり、地域に根付いた食品会社として事業を展開していましたが、ここ数年は営業不振が続いております。あちらにはスナック菓子など名物の製品も数多く出しており、我が時沢製菓と合併することで、製品としてのブランドは守れると考えております」

健雄「なるほど。さすがは専務。合併をするメリットがちゃんと明確だ。何か意見のある方はいらつしやいますか」

義和、挙手をする。

義和「ちよつとよろしいでしょうか」

健雄「常務、どうぞ」

義和「（その場に立つと）先方は、この合併に賛成なのでしょう。無理な合併は、恨みを買う火種になるかと」

千鶴子「阿井島食品はこれ以上経営を続けてたら間違いなく倒産します。せつかく良い商品があるのに、倒産してしまったらそれこそ消費者は悲しみます。我が社はピンチとなる企業を救う救世主になるんです。恨みを買うだなんて、発言には気を付けていただき

たいですね」

義和「……」

返す言葉もなく座ってしまう義和。

健雄「では、この審議案件について、賛成のものは挙手を願います」

一同、挙手をする。

健雄「ではこの件については、次の臨時株主総会で正式に議決を取るとしよう」

千鶴子「ありがとうございます」

と、一礼をする——含みな笑みを浮かべる。

61 同・総務部

香子が疲れ果てた顔をして仕事をしている——勝がそんな香子に気づくと、

勝「新婚生活、上手く行っていないようですね」

香子「初日から修羅場だったわよ、いろいろと」

勝「何となく察しはつきますけど」

香子「私、天涯孤独で親も兄弟も親戚もいなかったでしょ。だから昔から家族には憧れがあったの。でも、まだ家族ができたという実感もわかないし、家族ってこんなものなのかしらって考えちゃうのよね」

勝「家族もいろいろありますからね。どんな形の家族が正解なのかっていうものもありませんからね、なかなか難しいですよ」

香子「そうね……」

勝「そういえば、今、先日の取締役会の議事録のチェックしてるんですけど、やっぱり専務のやり方、ちょっと強引な感じがありますね」

香子「強引？」

勝「常務が意見を述べても、すぐ専務に圧倒されているというか……」

香子「家も職場も、変わらないわね……」

大きな溜息をつく香子。

62 株式会社阿井島食品・事務所

千鶴子が来ており、泰典の前に契約書を出す——あかりも同行している。

泰典、契約書を見ると、いきなり怒鳴り、

泰典「何ですかッ、これは……。吸収合併だなんて私は聞いてないッ。阿井島食品は、アライアンスパートナーを組むという話だったはずでは。これじゃ、ただの乗っ取りじゃありませんか」

千鶴子「これからも厳しい経営を続けるよりも、潔く合併したほうが阿井島食品で開発してきた製品は守れるんです。私共は救いの手を差し伸べるんですよ。乗っ取りだなんて、人聞きの悪いことをおっしゃらないでいただきたいですね」

泰典「しかし、こんなこと……」

千鶴子「取締役会では全役員の承認を得たんです。阿井島食品が立ち直るなんて、そんな期待誰もしてないんですよ」

泰典「……」

千鶴子「さ、早く契約書にサインを」
泰典「……」

千鶴子「社長が潔くしないでするんです」

泰典、ずっとためらっている。

千鶴子「どうされました？ 決断力が遅いようじゃ、経営者失格ですよ。経営者たるもの、潔さと即決さが大事なんですから」

泰典、ためらいながら手を震わせて契約書にサインをする——千鶴子、嘲笑うように契約書にサインをする泰典を見ている。

63 時沢製菓株式会社本社・総務部（夜）

香子が、議事録の書類を見ている——健雄が入ってくる。

香子「社長」

健雄「まだ残ってたのか？」

香子「先日の取締役会の議事録の確認をしております」

健雄「何かあったのか？」

香子「いえ……専務が提案した、阿井島食品との合併について、何か胸騒ぎがするとか」

健雄「胸騒ぎ？」

香子「ただの勘ですけどね……」

健雄「……」

香子「では、失礼します」

健雄「もう業務終了したんだ。今からはプライベートだぞ」

香子「健雄さん」

健雄「たまには一緒に帰ろう」

香子（微笑んで）「はい」

64 阿井島食品・表（朝）

啓太が走ってやってくる。

65 同・事務室

啓太が入ってくると、辺りを見回す。

啓太「父さん……？」

66 同・工場

啓太がやってくる。

啓太「父さん……？」

と、辺りを見回しながら、奥へと歩いていく。

啓太「父さん……？」

と、裏口のドアを開ける。

67 同・裏庭

ドアが開き、啓太が出てくる。

啓太、ゆつくりと上を見上げると、驚愕の表情を見せる。

啓太「……………」

68 時沢家・居間

香子、千鶴子、義和、小百合が朝食を食べている——給仕をしている美里。
と、インターホンが鳴る。

千鶴子「誰かしら、こんな朝早く」

美里、インターホンに出る。

美里「はい？」

と、あかりの声がする。

あかりの声「おはようございます。専務秘書の村瀬です」

千鶴子「こんな朝早くに何かしら」

美里「いかがでしたでしょうか？」

千鶴子「入れてちょうだい」

美里「かしこまりました」

と、出ていく。

顔を見合わせる香子と健雄。

あかりが入ってくる。

千鶴子「どうしたのよ？」

あかり「朝早く申し訳ございません。朝食の席で申し上げることではないと思ったのですが、緊急なことだったので」

千鶴子「何があったのよ」

あかり「……阿井島食品の社長が、自殺を図りました」

義和「……………」

健雄「……………」

香子「……………」

小百合「……………」

千鶴子「何ですって……………」

あかり「今朝、工場の裏庭で、首を吊っているところが発見されたようです」

香子「……………」

× × ×

× × ×

× × ×

雷が鳴り、雨が降る中、町工場に二つの首吊り遺体が、天井からぶら下がっている——その遺体を呆然と見ている五歳の少女（香子）。

× × ×

香子「……………」

あかり「救急車が駆けつけた時には既に手遅れだったとか」

小百合、勢いよく飛び出していく。

健雄「小百合、どうしたんだ」
香子「まさか……」

69 阿井島食品・事務室

小百合が駆け込んでくる——啓太が憔悴しきった顔で座っている。

小百合「啓太……」

啓太「(怒鳴って) 何しに来た!」

小百合「お父さんが亡くなったって聞いて……」

啓太「お前、よくここに顔出せたな」

小百合「え……?」

啓太「俺の父親は、時沢製菓に殺されたんだよ」

小百合「何のこと?」

啓太「お前、何にも知らないのか? 阿井島食品は時沢製菓に吸収合併されたんだよ。本

当は企業間連携という約束だったのに、お前のところの伯母さんに騙されて、阿井島食品は何もかも失ったんだ」

小百合「専務って……」

啓太「遺書に書いてあったよ。専務の時沢千鶴子を許さないってな」

小百合「……」

啓太「時沢製菓なんて、大嫌いだ……」

小百合「啓太……」

啓太「出てけよッ……」

と、小百合の腕をつかむと、ドアを開けて追い出し、鍵を閉める。

小百合「啓太……。ねえ開けて」

啓太「帰ってくれッ……。お前の顔なんか二度と見たくない」

小百合「啓太……」

その場にゆっくりと泣き崩れる。

70 イタリアビストロ『ブルーローズ』・表

放心状態になった小百合が、ゆっくりとやってくる——ドアを開けようとする

と、カウンター席で肩を寄せ合うように典江と譲吉が座っているのが見える。

71 同・店内

典江と譲吉が話している。

典江「ねえ、丹崎社長。私、そろそろ二号店を出して、法人化しようと思うの」

譲吉「良いじゃないか。また出資してほしいのか?」

典江「出資もだけど、社長に社外取締役になってほしいんです。社長が一緒だったら、私も心強いです」

譲吉「ああ、良いぞ。何でも協力するよ」

典江「ありがとうございます」

72 同・表

小百合、ゆつくりとその場を去っていく。

73 時沢家・玄関

小百合が帰宅する——美里が迎える。

美里「お帰りなさいませ」

小百合、何も答えないまま、階段を上っていく——不安そうな顔の美里。

74 時沢製菓株式会社本社・社長室

千鶴子、義和、あかりが横に並んでおり、社長席に座る健雄と話している。

千鶴子「合併の契約は、阿井島社長が存命の間に交わしてるわ。だから、後の事については万事滞りなく」

義和「そうでしょうか。このまま、何事もなく事が上手く進むとはとても」

千鶴子「これは私の担当案件よ。あなたに心配される筋合いはありません」

義和「……」

あかり「阿井島社長の通夜は、明日の十八時から、告別式は明後日の十一時から執り行われるとのことですよ」

健雄「私が出席しようか」

あかり「大丈夫でしょうか」

義和「そうですね。直接伺ったら、阿井島食品の関係者からどんな風に責められるか。伺っても、突き返されるのは目に見えてます」

健雄「覚悟の上だ。行かなかったら行かなかったで、どこまで非道なところだと責められるだろう」

義和「……」

千鶴子「そこは社長にお任せします。私は合併の件を早急に進めなければいけないので。では、失礼します」

と、出ていく——あかり、健雄と義和に一礼をすると、千鶴子の後を追っていく。難しい顔の健雄。

75 同・総務部

泰典が自殺をした記事のネットニュースが、香子のパソコンに表示されている。一同が、その記事を見ている。

社員A「部長の予感が当たりましたね」

社員B「これは、専務も何か責任取ったほうが良いんじゃないですか」

勝「けど、契約は交わしたって話だろ。最終的に契約の意思表示したのは阿井島社長だからな」

香子「それでも、専務のやり方には、納得できないものがあるけど。ま、こんなことが起こっても、気が動転するほど弱い人じゃないわよね、専務は」

険しい顔で腕を組む香子。

76 時沢家・玄関(夜)

千鶴子が帰宅する——美里が迎える。

美里「お帰りなさいませ」

千鶴子、美里に荷物を預けると、そのまま居間へ向かう。

77 同・居間

千鶴子と美里、入る——香子と義和が座っている。

香子「お帰りなさいませ」

義和「お帰り」

千鶴子「二人とも帰りが早いね。羨ましいわ」

と、小百合が勢いよく入ってくると、千鶴子をビンタする——啞然とする香子と義和。

千鶴子「いきなり何するのよッ……!」

小百合「人殺しッ……! 私、伯母さんだけは絶対に許さないから」

千鶴子「何を言い出すかと思えば」

小百合「阿井島食品の社長を騙して、会社を吸収合併したんでしょ。だから自殺した」

千鶴子「どうしてあんなにそんなこと言われなきゃいけないわけ?」

小百合「それは……私が、社長の息子と付き合ってたからよ」

義和「え……?」

香子「……」

千鶴子「へえ。あんたみたいな女と付き合い合ってくれるような青年がいたのね」

小百合「結婚することもお互いに考えてたわ!」

千鶴子「学生の分際で、何考えてるのよ、馬鹿馬鹿しい」

小百合「私たちは本気だった……。でも、今日限りで縁を切られた。時沢製菓を許さないって啓太に言われたわ。大切な人に、こんなこと言われた私の気持ちなんて、伯母さんには分からないでしょ。啓太はね、お母さんを早くに亡くして、お父さんしか頼れる人がいなかったの。けど、そのお父さんも亡くなって、啓太は一人ぼっちになったんだよ」

千鶴子「ビジネスに私情は厳禁よ。プライベートがどんなことになってようが、仕事には関係ないことだわ。もし仮にあんたが、阿井島食品の社長の息子と付き合ってることを先に知ってたとしても、私は今回の合併の話は進めた。それがビジネスってものよ」

小百合「本当最低……」

と、憤然と出ていく。

千鶴子「逆恨みもいい加減にしてもらいたいわ。ロクに事情も知らなくせに、自分の都合だけ勝手に押し付けられても、こっちにとっては目障りなのよ」

黙ったままお互いの顔を見合う香子と義和。

78 同・小百合の部屋

小百合がベッドで横になっている——ノック音がし、香子の声が聞こえる。

香子の声「小百合ちゃん。入るわよ(と入ってくる)」

小百合、香子に背中を向け、

小百合「何の用ですか？」

香子「阿井島食品の息子さんとの結婚、本気で考えてたの？」

小百合「何ですか、急に」

香子「結婚を考えてたってことは、本当に好きだったってことでしょ」

小百合「あなたに何が分かるんですか。私の気持ちなんて知らないくせに」

香子「啓太君って言ったわね、阿井島食品の息子さん。ご両親を亡くしたその子の気持ちなら、痛いほど分かるわ。私も同じような経験があるから」

小百合「え……？」

香子「私の両親はね、小さな町工場を経営してた。けど経営不振になって、両親は私を残して自殺したの」

小百合「それ……いつの話ですか？」

香子「私が五歳の時。もう四十五年以上も前の話ね。兄弟も頼れる親戚もいなくて、私はそこから高校卒業まで養護施設で育つたの。私にとってはそこで一緒に育つた子たちが家族みたいなものだった。けどやっぱり、ちゃんと自分で家族を作りたいっていう、希望や憧れはあったわ」

小百合「じゃあ、香子さんはずっと一人だったんですか？」

香子「笑っちゃうでしょ。この歳になるまで、結局仕事一筋で生きてきて、ようやく健雄さんと結婚できたんだから」

小百合「パパと再婚したから、一応夢は叶ったんじゃないんですか？」

香子「そうね。けど、本当はもっと早く一緒になりたかったけど」

小百合「昔付き合ってたんですよね。でも、伯母さんに無理やり別れさせられたって聞きました」

香子「ええ。せっかく家族ができると思ったのに、こんな別れ方させるなんて思ってもみなかった。まあ、あの時別れてなかったら、小百合ちゃんが生まれることもなかったって思うと、人の人生ってわからないなって思うのよね」

小百合「そうか……。パパは香子さんと別れてしばらくしてから、ママと付き合って、結婚したんだ。それで私が生まれた」

香子「そう。過去をどう思うよりも、今やこれからのことを考えないと」

小百合「……」

香子「小百合ちゃんが、私と健雄さんの再婚にずっと反対だっというのは承知してる。けど私は私なりに、これから自分の家族を作っていきたいの。時間はかかるかもしれないけど、そうやって家族って作られていくものだって私は思ってる」

小百合「……」

香子「今日はゆっくり休んだほうが良いわ」

と、出ていく——香子の後ろ姿を見ている小百合。

79 同・居間

健雄が晩酌をしている——側で付き添っている香子。

健雄「そうか……。小百合が、阿井島社長の息子と……」

香子「ええ。本気で結婚考えてたみたいよ」

健雄「時沢製菓を継ぐことよりも、自分の幸せを選んだってわけか」

香子「そういうことになるわね」

健雄「明日の通夜は行けないが、告別式に顔を出そうと思う」

香子「大丈夫？」

健雄「批判を受けることは覚悟の上だ。行かなかったら行かなかったで恐らく叩かれるだろ。まずはしっかりと、謝罪しないと」

香子「そうね……」

健雄「阿井島社長の息子の気持ち、香子なら分かるだろ」

香子「ええ。その話も、小百合ちゃんにしたわ。二人きりで、じっくり話したの、初めてだったかもしれない」

健雄「小百合がもう少し、香子との距離を縮めてくれたら嬉しいんだけどな」

香子「時間がかかっても良い。血がつながってなくても、もっと小百合ちゃんに、母親らしいことをしたいと思ってる」

健雄「ありがとう」

香子「ねえ。小百合ちゃん連れて、典江さんのところ行ってあげたら？ 久しぶりに親子水入らずの時間作れば、少しは元気になるんじゃないかしら」

健雄「良いのか？ お前にあんな花を届けたような奴だぞ。いくら離婚した元嫁とはいえ、あれは許せなかった」

香子「典江さんの意思表示だったのよ。私と健雄さんの結婚を心では認めてないっていう」

健雄「女っていうのは怖いな……」

香子「私は、男社会の中でずっと仕事一筋でやってきたの。確かに、黄色いバラもらったときは驚いたけど、そんなことで負けるほど、私は弱い女じゃないわ」

微笑み合う香子と健雄。

80 セレモニーホール・室内

泰典の告別式が行われている——弔問客がたくさん来ており、焼香をしている。

啓太が、一人ひとりの弔問客に一礼をしている。

そこへ、健雄がやってくると、啓太に一礼する——啓太、健雄に気づくと、健雄の元にやってくる。

啓太「お帰り下さい！」

和尚のお経が止まり、会場が騒然となる。

健雄「……」

啓太「時沢製菓の関係者に焼香していただいても、父は喜びません」

健雄「……」

啓太「お引き取りください！」

健雄、冷静を装い啓太に一礼すると、去っていく——その後ろ姿を恨めしそうに見つめる啓太。

81 同・表

健雄が難しい顔をして出てくる——小百合がやってくる。

小百合「パパ……」

健雄「小百合……」

小百合「美里さんから、ここに来てるって聞いたから」

健雄「そうか……」

小百合「どうだった？」

健雄「息子さんに、はつきり断られた」

小百合「そう……」

健雄「行かなくて良いのか？」

小百合「もう会わないって決めたから……ただ、これからどうするのか、それだけが心配……」

健雄「本当に好きだったんだな」

小百合「うん……」

健雄「久しぶりに、典江のところにも行くか」

小百合「え？」

健雄「親子水入らずの時間作れば元気になるんじゃないかって、香子が言ってくれたんだ」

小百合「香子さんが……」

健雄「典江のところで、美味しいものでも食べよう」

小百合「……」

82 イタリアビストロ『ブルーローズ』・店内

健雄と小百合がカウンターに座っている——典江が接客をし、話している。

典江「へえ、阿井島食品を吸収合併ね。それで啓太君のお父さんが自殺したってわけだ」

健雄「何だお前。息子さんのこと知ってたのか？」

典江「だってよく小百合が連れて来てたもの。小百合も、親が敵同士みたいなことになってこれからやりづらいわね」

小百合「縁を切られた、啓太に。時沢製菓を許さないって言われたとき、もう一緒にはいられないって、自分でも分かった……」

典江「いつも仲良く来てくれて、お似合いだと思ったのになあ。そんなに落ち込んでたんなら、もっと早くうちに来てくれれば良かったのに」

小百合「行こうとしたけど、ママ、丹崎社長と仲良さそうに話してたから」

典江「ああ……。あのタイミングで来たのね……。事業拡大の相談に乗ってただけよ。一

切いかかわしいことなんてないから、安心して」

小百合「そうか……」

典江「きつと、気持ちが悪く落ち込んだから、全部変な方向へ物事を考えてただけよ」

小百合「かもしれないね」

健雄「啓太君と結婚するってことは、うちの会社は継がなくても良いとでも思ったのか？」

小百合「まあね……。伯母さんからも期待されてないし、今の私にはパパの後を継ぐ力もないって分かった。だから、啓太と結婚して、いずれ社長になる啓太を支えたらそれ

れで良いと思ってた」

健雄「小百合なりの人生設計を、俺が壊してしまったってわけか……」

小百合「パパは悪くないよ。啓太から聞いた。合併の話を持ってきたのは、伯母さんだつて」

典江「そうなの？」

小百合「うん」

典江「どこまで人の人生壊したら気が済むのよ、あの人は。天罰が下ると良いわ」

健雄「典江……」

典江「たった一人の姉弟でも、許せないことだってあるでしょ。私たちがあの女にどれだけ酷い扱い受けてきたか」

健雄「まあ、そうだけどな……」

小百合「パパはある意味、私たち女の闘いの被害者かもしれないね」

健雄「それだけのことが言えるんなら、お前はもう大丈夫だ（と笑う）」

小百合「（微笑んで）うん……」

安堵したように笑っている典江。

83 時沢製菓株式会社本社・全景

84 同・総務部

香子や勝たちが仕事をしている。

勝「部長、聞きましたか。今、広報部が大変なことになってるっていう話」

香子「広報部？」

勝「ええ。例の阿井島食品の社長の自殺のことで、時沢製菓への批判の書き込みを中心に、ネットやSNSが炎上してるそうなんです」

社員A「私も聞きました。中には脅迫状みたいなものが届いて、警察に対処してもらったこともあったそうです。それで今、広報部が面倒な対応に追われているとか」

香子「そんなことになってたの……」

勝「ええ」

香子「ねえ。広報部って、確か常務が担当執行役員を兼任してたわよね」

勝「はい」

香子「常務なりに、何か対処を考えてると良いけど……」

不安そうな顔の香子。

85 同・廊下

千鶴子が不機嫌そうに小走り気味に歩いている——付き添うあかり。

86 同・会議室

義和が待っている——ドアが開き、千鶴子が迫ってくるように入ってくると、

千鶴子「常務。一体どういいうつもりなの。阿井島食品との合併を取り消せなんて。あなた、正気？」

義和、書類の束を机の前に出す。

義和「これが何か分かりますか？ 先週から弊社に来たクレームや批判の対処をまとめた

ものです。これ全部、阿井島食品との合併のことばかりです」

千鶴子「それがどうしたって言うの？」

義和「広報部担当執行役員として言わせてもらいます。これ以上批判が続くようでは、時沢製菓のイメージダウンにもなりかねません。それならば、阿井島食品との合併を取り消したほうが、これ以上火に油を注ぐことはありません。時沢製菓の今後のためにも……」

千鶴子が、机を強く叩く。

千鶴子「何をさっきから偉そうなこと言ってるのよ」

義和「……」

ドアが少し開き、あかりが外から様子を伺っている。

あかり「……」

義和「……」

千鶴子、椅子に座り込むと、

千鶴子「あなた、専務の私によくもそんなこと言えたわね。何が時沢製菓の今後のためよ。

婿養子の分際で一人前の口聞くんじやないわよ」

義和「ですから私は、常務取締役兼広報部担当執行役員として……」

千鶴子「(遮って甲高く笑い)常務取締役兼広報部担当執行役員としてですって？ 大して仕事もできないくせに、よく言うわよ。亡くなったお父様が、あなたを気にいって私の婿について決めたのはね、あなたのことがほっとけなくて、もっと成長してもらいたかっていう私情を挟んだことが招いた結果なのよ」

義和「……」

千鶴子「常務取締役、広報部執行役員、時沢家の婿養子……全部肩書きだけじゃない。あ

んたはね、肩書きだけしか背負えない程度の男なのよ！」

義和「……」

千鶴子「ただの平社員だったあなたが、飛び級で常務取締役になって会社の中では社員たちから持ち上げられて、家では上げ膳据え膳、外では接待交際費で高級な料理を食べられる。それらは全部、私がいたおかげでしょ。私の婿養子だからできたことなのよ。子種もなくて私との間に子どもも作れなかったでしょ。結局あなた一人じゃ、何もできないただの役立たずなのよ」

義和「……」

千鶴子「合併の件はね、ちゃんと私が株主の方たちに根回しをしておいたわ。私の力があれば、あなたの提案してくる意見なんて速攻で破棄することができるの」

義和「……」

千鶴子「はっきり言っておくわ。そもそも、あなたと結婚したことが間違いだっただのよ」

義和「……」

千鶴子「もうあなたは用無しよ。結局は他人だっただけのこと」

義和「……」

千鶴子、椅子から立ち上がると、義和を睨みつけながら出ていこうとする——ドアの前で立ち止まると、

千鶴子「あなたは、肩書きだけに身を包んだ仮面野郎ね」

と、捨て台詞を吐いて出ていく——義和、強く拳を握る。

87 同・廊下

難しい顔をした義和が歩いている——あかりが後ろから声をかける。

あかり「常務」

義和「ああ、君か」

あかり「大丈夫ですか？」

義和「聞こえてたのか」

あかり「あれだけ怒鳴れば、外に控えてる私には丸聞こえです」

義和「……」

あかり「本当にこのままで良いんですか？」

義和「え？」

あかり「常務、私と組みませんか？」

義和「……」

88 イタリアビストロ『ブルーローズ』・店内

典江が電話をしている。

典江「ええ。分かりました。そこは、私にお任せください。はい、失礼します」

と、電話を切る——奇妙な笑みを浮かべ、甲高く笑う。

89 時沢製菓株式会社本社・全景

90 同・ホール

香子や勝たちが、株主総会の準備に追われている。

香子「出席者の漏れはないわね」

社員A「大丈夫です」

香子「音響は大丈夫かしら」

社員B「（マイクをオンにし）音響問題ありません」

香子「オッケーね」

勝「もうそろそろ、株主の皆さんがお見えになりますね」

香子「そうね」

勝「次第を見ましたけど、やっぱり専務、合併の件をそのまま審議通すようですね」

香子「一度決めたことは曲げない方だからね。恐らく株主の方への根回しだって完璧にしてるだろうし。ま、私たち総務部は、とにかく今日の株主総会を円滑に進めるためにしっかりと設営をすること。それだけを頑張りましょう」

勝「はい！」

大きくうなづく香子。

91 同・ロビー

株主たちがぞろぞろと入ってくる。

株主たちがやってきて、席へ案内される——壇上の袖から様子を伺っている香子。

× × ×
時間経過——。

株主総会が行われている——司会を担当している香子。

香子「それでは、議長を担当させていただきます、総務部長の時沢香子でございます。円滑な議事進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。では審議案件に移らせていただきます。『審議項目一 株式会社阿井島食品との合併について』時沢千鶴子専務取締役、よろしくお願いいたします」

千鶴子が登壇する——一礼をすると、

千鶴子「専務取締役の時沢千鶴子でございます。株式会社阿井島食品との合併についてですが、資料にありますように、業績不振となっている阿井島食品を弊社が合併することで、阿井島食品のブランドのある製品を弊社の商品として販売することで業績をあげる事が可能であると考えます」

香子「ありがとうございます。こちらの審議について、意見等ある方はいらっしゃいますでしょうか？」

株主の一人が挙手をする——一同の視線が集中する。株主の一人は、讓吉である。その隣には、典江が座っている。

健雄、典江の存在に気づく。

健雄「典江……」

勝が讓吉にマイクを渡す。

讓吉「丹崎ホールディングスの丹崎です。千鶴子専務。この案件について、良からぬ話を聞いたのですが」

会場がざわつく。

香子「丹崎様。詳しくお話いただけますでしょうか」

讓吉「はい。元々、阿井島食品さんにはアライアンスを組むという話が進んでいました。

しかし、専務がいつどこで話を変えたかは分かりませんが、取締役会の時には阿井島食品さんを吸収合併するという話が変わっていたとか。亡くなられた阿井島社長に契約書のサインを求めたときも、強引な手を使ったと聞いています」

「どうなってるんだ！」と株主たちから非難の声が続出する。

香子「皆様、ご静粛にお願いします」

讓吉「アライアンスを組む予定だという企画書も先日メールで確認させていただきました。

このようなやり方を行う人が専務を務めるなど、株主として黙認するわけにはいきませぬ。そこで私は株主の一人として、千鶴子専務の解任を提示させていただきます」

「そうだそうだ！」と株主たちの声が響き渡る。

呆然と立ち尽くしている千鶴子。

その様子を嘲笑うように見ている典江。

お互いにながき合う義和とあかり。

難しい顔のまま座っている健雄。

オロオロとしたままの香子。

93 同・ロビー

株主たちがブツブツ文句を言いながら出ていく——「申し訳ございませんでした」と謝罪しながら見送りをしている香子たち。

典江と讓吉が通っていく。

典江「香子さん」

香子「典江さん、どうして丹崎様と」

典江「私のレストランに出資してくださった大事なビジネスパートナーなのよ」

香子「そうだったんですか」

典江「讓吉に」こちら、時沢香子さん。総務部長で、健雄さんの再婚相手なんです」

香子「時沢香子と申します」

讓吉「先ほどはどうも。丹崎です」

典江「健雄さんと離婚したとき、もしものためにとあって、丹崎社長に時沢製菓の株主になってもらったのよ。私と丹崎社長と繋がったことなんて、お義姉さんご存知なかったのね。まさかこんな時に株主としての力を発揮できるなんて思わなかったわ」

香子「そうだったんですか」

典江「これである人も、自分の立場が分かったでしょ」

香子「それにしても、どうして丹崎様は、専務の行いをご存知だったんですか？」

典江「私が教えたの。専務秘書の村瀬さんから連絡もらって」

香子「村瀬さんが……」

典江「あの人も専務秘書とはいえ、お義姉さんと一緒にいることに限界を感じてたんですよ」

香子「……」

典江「これからが楽しみね。じゃ、私はこれで。行きましょう」

讓吉「ああ。（と香子に）では」

香子、深く一礼をして見送る。

94 同・社長室

健雄と千鶴子が入ってくる——千鶴子、落胆してソファに座り込む。

千鶴子「どうしてよ……」

健雄「まさか丹崎社長と典江がな……」

千鶴子「あの女、絶対許さないわ……」

と、ノック音がし、義和が入ってくる。

義和「因果応報ですね、専務。これまでの行いが全部返ってきたんですよ」

千鶴子「まさか常務、あんたが……」

義和「典江さんが丹崎社長を懇意にしていたことは知っていました。計算高い典江さんなら、何かしているだろうと思ひ、丹崎社長がうちの株主になっていたことを確認したんです」

千鶴子「いつの間にあの女に加担したのよ……」

義和「役立たずと言われたので、私なりに自分にできることを精一杯やったまでのこと」
千鶴子「……」

健雄「……」

義和「そうだ。これを専務にお渡ししておきます」

と、背広の内ポケットから一枚の紙を取り出すと、テーブルの上に置く。

千鶴子、その紙を開いて見る。

千鶴子「……！」

その紙は離婚届である——既に義和のサインがしてある。

健雄「(離婚届を見て) 義兄さん……」

義和「長い間、お世話になりました。社長には、こちらを」

と、『辞表』と書かれた封筒を渡す。

健雄「本気ですか」

義和「これ以上、ここにいない意味がないと思ったので」

健雄「辞めてどうするんですか？」

義和「実は、典江さんが事業を拡大するために法人化するにあたって、専務取締役として来てくれないかとお誘いを受けまして」

健雄「典江の……」

千鶴子「勝手にすれば良いじゃない。去る者追わずだから」

義和「近いうちに荷物をまとめて、あの家を出ます」

健雄「もう決めたんですね」

義和「はい」

健雄「……」

義和「では、失礼します」

と、一礼して出ていく。

千鶴子「……」

健雄「姉貴……」

千鶴子「これで良かったのよ。目障りな人がいなくなってホッとするわ」

健雄「これから、どうする？ 退任の件は、一旦は保留にしてみらったが、近いうちに結論を出して、臨時の株主総会を開いて承認を得なければいけないんだ」

千鶴子「そこはあなたに任せるわ。クビにしたければ、どうぞご自由に」

と、不機嫌そうに出ていく——険しい顔の健雄。

95 同・廊下

義和が歩いている——香子の姿を見つける。

義和「時沢部長」

香子「常務」

義和「今日はお疲れ様でした」

香子「驚きました。まさか、専務退任を提示してくるなんて……」

義和「さつき、専務には離婚届を、社長には辞表を出してきました」

香子「そうですか……」

義和「専務とは、やっぱり合わなかったんだ。典江さんが私のためにポストを用意してくれていて、そつちに行こうと思う。そのほうが、伸び伸びと仕事ができる気がするんだ」
香子「そうですか……」

義和「これからの時沢製菓をよろしく頼みます」
寂しそうな顔で義和を見る香子。

96 時沢家・全景(夜)

97 同・夫婦の部屋

健雄が仕事をしている——風呂上がりの香子が入ってくる。

香子「まだ仕事してたの？」

健雄「専務退任だけでなく、常務まで退任することになったからな。人事をどうしようかと思ってるな」

香子「今日、お義兄さんに会って聞かされた。典江さんのところに行くって」

健雄「どうすれば良いんだろうな……」

香子「社長は健雄さんなんだから、健雄さんが決めれば良いんじゃない。ちゃんと取締役の人たちや株主の方たちは、分かってくれるわよ」

健雄「……なあ、香子」

香子「何？」

健雄「うちの専務取締役になってくれないか？」

香子「え……健雄さん、何言ってるのよ」

健雄「俺が決めれば良いって言っただろ」

香子「けど……私なんて」

健雄「前に言っただろ。『良い企業には良い総務がある』って。香子は総務部長として、本社に戻ってきてからのこの一年近く、時沢製菓を支えてくれた。これからは、専務取締役となつて、ビジネスとして俺の右腕になってほしいんだ」

香子「けど、私なんか専務に……」

健雄「この件は、臨時総会で一発審議にかけようと思う。役員や株主の方には、俺から説得しておく」

香子「……」

健雄「俺についてきてほしい。香子しかないんだ」

香子「分かったわ」

健雄「ありがとう」

香子「その代わり……」

健雄「……？」

香子「一つ、条件がある」

98 時沢製菓株式会社本社・全景

T 「臨時株式総会当日」

99 同・総務部

社員たちが仕事をしている——勝と総務部社員の一部が戻ってくる。一同の手が止まる。

勝「今日の株主総会で……」

一同「……」

勝「時沢部長の専務取締役就任が承認された」

歓声をあげる一同——勝も喜んでいる。

100 大学・中庭

自販機でジュースを買っている小百合——スマートフォンに通知が来る。相手は典江からである。

小百合「ママ……？」

と、典江からのメッセージを見る。

典江の声「香子さんが専務になることが決まったよ」

小百合「香子さんが……。」（と微笑むと）おめでどう、お母さん」

と、スマートフォンをポケットにしまうと、中へ入っていく。

101 時沢製菓株式会社本社・専務室

千鶴子が窓からの景色をボーっと眺めている——健雄が入ってくる。

千鶴子「どういふつもり？ 香子さんを専務取締役にするのは納得できるけど、何で私を

常務取締役への降格に留めたの？ 私、クビを覚悟してたのに」

健雄「……親父の遺言、覚えてるか？」

千鶴子「家族で助け合え、でしょ」

健雄「俺、その言葉を忘れかけてたんだ」

千鶴子「……」

健雄「でも、その言葉を思い出させてくれたのは、香子なんだ」

102 時沢家・夫婦の部屋（回想）

香子と健雄が話している。

健雄「姉貴を常務取締役に？」

香子「ええ。お義姉さんは、強引なことをこれまでだっけてきたんだと思う。でもそれ

は、私腹を肥やすためじゃない、時沢製菓の看板を守るためにやってきたことですよ。

私も仕事一筋で来たから分かる。お義姉さんをクビになんかしたら、それこそどうにか

なっちゃうと思うの」

健雄「けど……」

香子「確かにお義姉さんには、嫌な想いされてきた。けど私たちは、時沢製菓を守るとい

う共通の目標があるってことに気づいたの。お義姉さんを常務取締役への降格に留めて

くれたら、私は専務取締役の役を引き受ける。その条件が飲めなかったら、私は専務や

らないから」

103 時沢製菓株式会社本社・専務室（回想戻り）

千鶴子「香子さんが、そんなことを……」

健雄「時沢家の人間となった以上、家族で助け合いたいっていう、香子なりの考えと覚悟があるんだよ」

千鶴子「……」

健雄「そろそろ香子のこと、認めてやったらどうだ」

千鶴子「……」

104 時沢家・一室（夜）

健雄がドアを開けて、電気をつける——荷物が何一つなく、綺麗に片付けられている。美里が通りかかる。

美里「旦那様、いかがされました？」

健雄「こうしてみると、この部屋って広いんだな」

美里「義和さんの荷物整理してましたが、あまり大きな荷物はありませんでした。いらないものはこちらで処分するように言われましたし」

健雄「姉貴たち、家庭でも仕事でもちゃんとお互いに支え合っていれば、もっと良い夫婦になれたと思うんだけどな」

美里「夫婦の形はそれぞれですからね。まあ、ずっと独身の私が偉そうに言える立場ではないですけど（と一礼して去っていく）」

健雄、少し寂しそうな顔で部屋を眺める。

105 時沢製菓株式会社本社・全景

同・専務室

香子が椅子に座る——椅子に慣れておらず、座り直す。ノック音がある。

香子「はい」

と、あかりが入ってくる。

あかり「おはようございます」

香子「おはようございます」

あかり「私が引き続き、専務秘書を務めさせていただきます。よろしくお願いします」

香子「こちらこそ、よろしくお願いします」

と、千鶴子が入ってくる。

香子「せん……じゃなくて、常務、おはようございます」

千鶴子「どんな考えがあるか知らないけど、礼は言わないわよ。こんな降格でへこたれるほど、私は落ち込んでないわ。またいつか専務のポストに返り咲いてやるから、そのつもりで」

香子「ではその間、私がしっかりそのポストをお預かりいたします」

真剣な眼差しで見つめ合う香子と千鶴子。

107 時沢家・居間

健雄が出かける支度をしている——手伝っている美里。小百合が顔を出すと、
小百合「行ってきます」
健雄「おお、行っておいで」
美里「行ってらっしゃいませ」

108 同・表

小百合が出てくる——停車しているリムジンの前に立っている啓太に気づく。
小百合「啓太……」

啓太、小百合に気づく。

啓太「……」

小百合「……」

と、健雄が出てくる。

健雄「おはよう」

啓太「おはようございます」

健雄「(小百合に) 啓太君は、俺が責任を持って面倒を見ることにしたんだ。これが父さん
なりの罪滅ぼしだ」

小百合「パパ……」

啓太「そういうことなので……これから、社長のもとでお世話になります。よろしくお願
いします」

小百合「啓太……」

健雄「そんな他人行儀になることないだろ」

啓太「……」

小百合「やっぱり私、啓太のこと……」

啓太「うん、分かってるよ……」

小百合「……」

啓太「俺も、やっぱり忘れられなかった……」

啓太「俺は俺なりに、また出直そうって決めたんだ。そうしたら、時沢社長に声をかけて
いただいて」

健雄「小百合とこのことを全部知った上で、面倒を見ることにしたんだ。小百合、それで良
いな」

小百合「うん……。パパ、ありがとう」

うなづく健雄——微笑んでお互いを見つめ合う小百合と啓太。

109 道を走るリムジン

110 イタリアビストロ『ブルーローズ』・店内

典江、義和、讓吉が資料を見ながら打ち合わせをしている。

111 時沢製菓株式会社・表

香子、千鶴子、あかり、その他役員たちが直立して待っている——啓太の運転する
リムジンがやってくる。

啓太、運転席から降りると、移動し、後部座席のドアを開ける。
後部座席から、健雄が降りてくる。

一同「おはようございます」

と、深々とお辞儀をする。

健雄「おはよう」

啓太「行つてらっしゃいませ」

中へ歩いていく健雄——一同、後をついていく。

啓太、一礼して見送る。

112
同・ロビー

健雄を先頭に香子、千鶴子、あかり、その他役員たちが歩いていく。

勝が出社してくると、香子たちに気づき、会釈をする。

香子、勝に気づくと、笑顔を返し、歩いていく。

先頭の健雄、その後ろに並ぶ香子と千鶴子、更に後ろに並ぶあかり。一同真剣な顔
で歩いていく。

完